

4 子どもの理想学歴と家庭環境

北海道大学大学院文学研究科准教授 平沢和司

1. はじめに

本節では、中学3年生が将来得たいと考えている学歴が、家庭環境とどう関連しているのかを考える。ここでいう学歴とは、どこの大学を出たいかではなく、どの段階の学校まで行きたいかを指す。具体的には、「あなたは、理想的には、将来どの学校まで行きたいと思えますか。」

(子ども票問 14) を尋ね、「中学校まで、高等学校まで、(高卒後の) 専門学校まで、高等専門学校・短期大学まで、大学まで、大学院まで、その他」から一つを選択してもらった。その他は分析から除外したうえで、これを「子どもの理想学歴」と呼ぶことにする。

この質問は研究者の間では、教育アスピレーションまたは学歴アスピレーションと呼ばれている。アスピレーションとは、やや耳慣れない用語かもしれないが、強い願望・あこがれ・夢といった意味である。つまり実現できるかどうかは別として、自分としてはぜひ行きたい学校段階を指す。したがって、つづけて尋ねた「あなたは、現実的には、どの学校まで行くことになると思えますか。」(子ども票問 15、選択肢は理想学歴と同じ) は、願望よりは実現可能な学歴という意味で、さきの理想学歴とは一応区別される。こちらは「子どもの予想学歴」と呼ぶことにしたい。

高等教育を受ける機会に関する研究において、理想学歴が実際に到達した学歴に影響していることが、1980年代のアメリカで本格的に検討され始めた。その後、日本でも同様の検証がなされるとともに、近年では子どものみならず親がどのような学歴を期待するかが、子どもの実際の学歴に影響することにあらかじめ注目が集まっている(たとえば片瀬 2005、吉川 2009)。本調査では保護者にも子どもに期待する学歴(以下では「両親の期待学歴」という)を尋ねているので、それらを組み込んで分析を進める。

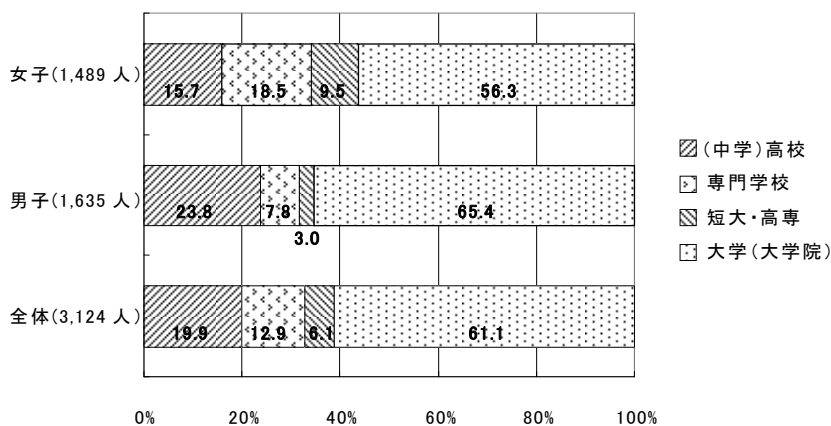
なお、子どもは中学3年生なので、当然のことながら、最終的な学歴はまだ分からない。それでも「子どもの理想学歴」「子どもの予想学歴」及び「両親の期待学歴」が以下に登場するので紛らわしいが、まずは分析の焦点である「子どもの理想学歴」から見てみたい¹。

2. 子どもの理想学歴に違いをもたらす成績と世帯所得

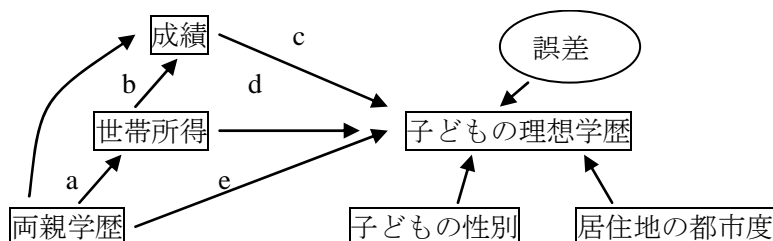
図IV-4-1は、子どもの理想学歴の分布を男女別に示したものである。過半数(61.1%)が大学または大学院(以下では大学(院)と表記)までを希望しているものの、その比率は男子(65.4%)のほうが9.1ポイント高い。同時に高校までの者は、男子のほうが若干高い。また女子は18.5%が専門学校までを希望している。

こうした理想学歴の違いは、いまみた性別のほか何によってもたらされるのであろうか。いろいろな要因が考えられるものの、子ども本人に関わるものとしては学校での成績がまず浮かぶ。いくら理想とする学歴とはいえ、ほとんどの者は目前に高校受験を控えており、自分の現

¹本節の分析では、保護者票と子ども票を結合したデータを用いた。分析対象となるのは、親と子どもの双方の回答が有効な3,178組の親子のうち、保護者票の回答者が「実父・実母・義父(養父)・義母(養母)」(3,159人)で、かつ子どもの理想学歴が「その他」(35人)でない3,124組の親子である。なお、できるだけ分析対象数を多くするため、各変数に無回答の者も含めてある。



図IV-4-1.子どもの性別と理想学歴



図IV-4-2.子どもの理想学歴の違いをもたらす要因

注.表IV-4-1のモデル1に対応。ただしパスがない変数間にも関連を認めている。

在の成績とまったく無関係に将来を展望しているとは考えにくいからである。事実、「理想学歴」と「予想学歴」は（調査票の学歴区分で集計して）82.4%の子どもで一致している²。

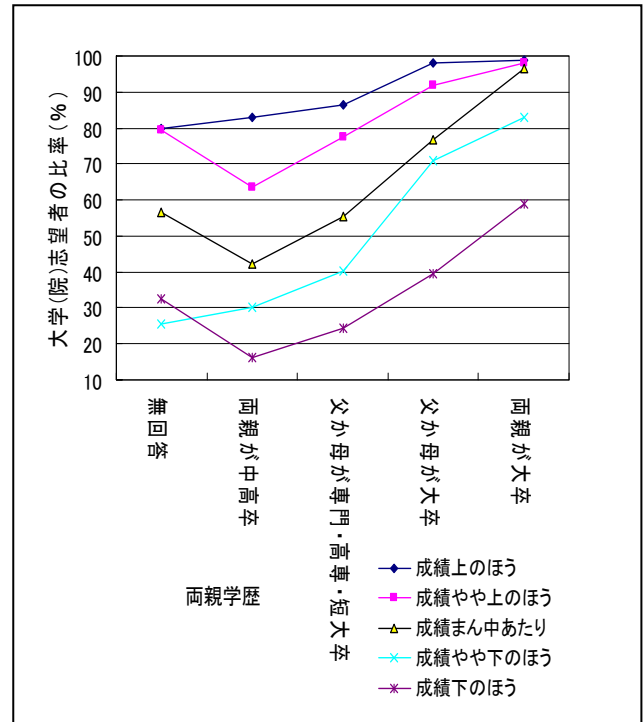
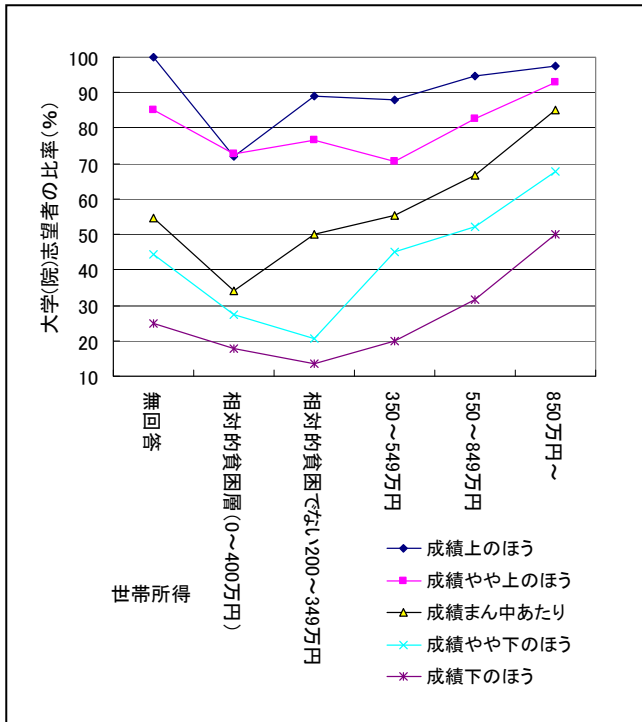
つぎに子どもの家庭環境として、世帯所得と両親の学歴が考えられる³。一般に、両親の学歴が高い家庭は、世帯所得が高く、塾や家庭教師などの学校以外での教育への支出がしやすいので、学校での子どもの成績が高いと予想される。これらの関係を示したのが図IV-4-2で、その因果的な連鎖はパス a→パス b（→パス c）で示されている。パスとは要因間の関係のことで、矢印の元が原因、矢印の先が結果となることを想定している。

このように複数の要因が理想学歴に影響する可能性があるのでやや複雑であるが、試みに世帯所得と成績が理想学歴に影響していることを示したのが図IV-4-3である⁴。これは図2でいえば、パス d とパス c を同時に集計した表にあたる。まず①世帯所得にかかわらず（つまりどの所得層であっても）成績の高い者（図中ではより上の線分）のほうが、大学（院）志望率が高い。同時に②成績が同じ程度であっても、世帯所得が高い家庭の子ども（世帯所得が無回答の家庭をのぞいて、図中ではより右）のほうが、大学（院）志望率がより高い傾向にある。たと

² 「理想学歴」と「予想学歴」の一致度が高いということは、子どもが両者の違いをあまり意識せずに、現実的な「理想学歴」を答えている可能性もある。ただしこの質問の方法は一般的なのでそれなりに妥当だと考えられる。

³ ここでの世帯所得は、相対的貧困層かどうかと無回答（108世帯）を組み込んで6つに分類した。なお、400万円以上の世帯に相対的貧困層はいない。また200万円未満はすべてが相対的貧困層に含まれる。くわしくは調査の概要を参照。

⁴ 成績を子ども間で比較するときには学校差（学校の設置者や地域など）を考慮することが望ましいが、その調整が実際には難しいので、ここでは行っていない。



図IV-4-3 世帯所得別・成績別子どもの理想学歴 図IV-4-4 両親学歴別・成績別子どもの理想学歴
注.成績が「どれにもあてはまらない」を除いて集計。

例えば成績が「下のほう」であっても、高所得層（850万円以上）であれば、大学（院）志望率が50.0%であるのに対して、相対的貧困層では17.7%に過ぎない。

3. 親の学歴と期待の影響

同様に両親学歴と成績ごとに理想学歴を集計したのが図IV-4-4である⁵。傾向は図IV-4-3とほぼ同じで、①と②の「世帯所得」を「両親学歴」に読み換えればよい。ただし図IV-4-4で特に注目されるのは、両親学歴の影響が、成績上位層に比べて下位層で顕著なことである。具体的には、成績が「上のほう」では、両親がともに中卒または高卒の子どもの大学（院）志望率は82.8%、大卒の両親をもつ子どもは99.0%で、その差は16.2ポイントにすぎないのに対して、成績が「やや下のほう」では、それぞれ30.0%と82.9%で、その差は52.9ポイントに及ぶ。つまり両親がともに中学卒または高校卒で、かつその子どもの成績が低いと、大学（院）志望率が顕著に低いということである。これは、成績の影響の強さが両親学歴によって異なること、つまり両者の交互作用を疑わせる結果である。

ただし、以上はわかりやすさを優先して男女を分けずに行った集計であり、それぞれの家族が教育機会の豊富な都市部に住んでいるか否かも加味していない。そこで理想学歴に対して、子どもの性別、成績、世帯所得、両親学歴及び居住地の都市度の影響を同時に吟味する必要がある⁶。ここではロジスティック回帰分析を用いて、理想学歴が大学（院）か、それ以外か（つ

⁵ 親が高校を中退の場合は中学卒に、専門学校、短期大学・高等専門学校、大学の中退（または在学中）は高校卒に、大学院の中退・在学中は大学卒に分類してある。またひとり親であっても、離死別前の配偶者の学歴（問46,47）を答えてもらっているため、両親学歴の集計に含まれる。ひとり親に関する詳細な分析は、稲葉と藤原の分析文を参照。

⁶ 子ども数（=きょうだい数）が多ければ、子どもひとりあたりの教育に関わる支出が減少する可

表IV-4-1.子どもの理想学歴が大学(院)かどうかを従属変数とするロジスティック回帰分析

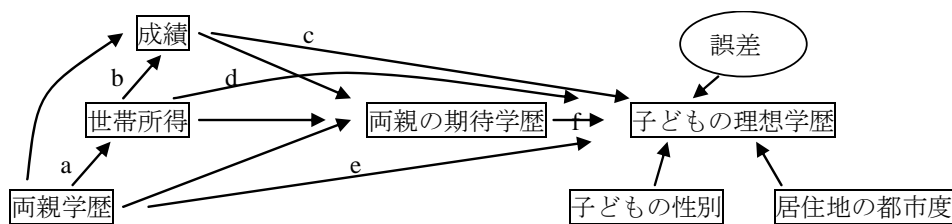
(従属変数)		モデル1		モデル2		
希望学歴	1: 大学(院)1908, 0: 大学(院)以外1216	n	B	オッズ比	B	オッズ比
(独立変数)						
両親学歴	両親が大卒	346	2.260 ***	9.583	1.465 ***	4.327
	父か母が大卒	874	1.283 ***	3.608	.716 ***	2.046
	父か母が短大・高専・専門学校卒	786	.418 ***	1.518	.224	1.251
	両親が中学・高校卒(基準)	924				
	無回答	194	.412 *	1.510	-.020	.980
家計所得	850万円以上	710	1.114 ***	3.048	.551 *	1.735
	550～849万円	920	.681 ***	1.975	.318	1.375
	350～549万円	702	.353 *	1.423	.270	1.309
	相対的貧困ではない200～349万円	263	.011	1.011	.120	1.128
	相対的貧困(0～400万円)(基準)	421				
	無回答	108	.536 *	1.709	.235	1.265
居住地	大都市	687	1.026 ***	2.791	.872 ***	2.392
	市部	2087	.512 ***	1.668	.427 **	1.533
	町村部(基準)	350				
子どもの性別	男子	1635	.514 ***	1.672	.150	1.161
	女子(基準)	1489				
成績	上のほう	424	3.365 ***	28.928	2.697 ***	14.842
	やや上のほう	696	2.512 ***	12.331	1.906 ***	6.729
	まん中あたり	889	1.503 ***	4.497	1.205 ***	3.335
	やや下のほう	537	.912 ***	2.489	.863 ***	2.371
	下のほう(基準)	527				
	どれにもあてはまらない・無回答	51	.439	1.551	.819 *	2.268
両親の期待学歴	両親とも大学(院)を期待	1507			3.245 ***	25.656
	父か母が大学(院)を期待	520			2.047 ***	7.744
	わからないを含むその他の組み合わせ	670			.758 **	2.134
	両親とも(中学)高校を期待(基準)	306				
	無回答	121			2.195 ***	8.976
-2LL			2969.741		2487.916	
χ^2			1206.479 ***		481.824 *** (モデル2-モデル1)	
疑似決定係数			.434		.566	
自由度			17		21	
n			3124		3124	

注. 切片は省略。***p<.001,**p<.01,*p<.05。

まり中学、高校、専門学校、高専・短大までか) のどちらになりやすいかを検討する。その方法の理解と結果の読み取りにはやや専門的な知識が必要なので、必要に応じて注⁷を参照してい

能性があるので、子ども数を独立変数に組み込むべきとの異論があるかもしれない。しかし相対的貧困には世帯人数がすでに考慮されているので、投入しなかった。また、通常は両親の職業を分析に加えるが、本データでは従業上の地位だけを尋ねていて職種に関する情報がないので、投入できない。

⁷ ロジスティック回帰分析とは、結果となる従属変数が、大学(院)を希望する(1)か否か(0)、といったように2つの値だけをとるときに、そのいずれになりやすいかを、(複数の)原因と考えられる独立変数で説明できるかどうかについて検証する方法である。表IV-4-1ではまず有意な(*が1つ以上ついている)独立変数に着目する。有意というのは、調査対象者(標本)だけではなく、標本を無作為抽出する元となった母集団(この調査では中学3年生の子どもをもつ全国の家庭)でも、独立変数の影響が認められると理解してよい。偏回帰係数(B)が正のカテゴリーは、(基準)と書かれたその変数の基準カテゴリーに比べて、理想学歴が大学(院)になりやすいことを、逆に負のカテゴリー・変数は、なりにくいことを示す。たとえば世帯所得が350～549万円の家庭は、基準となる相対的貧困の家庭より、子どもが大学(院)を志望する傾向(モデル1では0.353、正で有意)にあるが、相対的貧困ではない200～349万円の家庭では、子どもが大学(院)を志望するかどうかに関して、相対的貧困の家庭と有意な差がない。ただし、こうした偏回帰係数は、世帯所得以外の他の変数を統制(つまり影響を除去)したときの正味の効果で、世帯所得だけを投入し



図IV-4-5.子どもの希望学歴の違いをもたらす要因

注.表IV-4-1 のモデル 2 に対応。ただしパスがない変数間にも関連を認めている。
 なお一部の変数間では逆向きの因果も想定しうるが、ここでは考慮していない。

ただくこととし、結論だけを列挙すれば下記の通りである。

表IV-4-1 のモデル 1 から、③子どもの性別、成績及び居住地の都市度を統制しても（つまり都市度が同じ地域に住み性別が同じで、成績が同程度の子どもの間でも）、両親学歴がより高く、世帯所得が高い家庭の子どものほうが、大学（院）を希望する傾向にある。ただし相対的貧困層と、相対的貧困でないものの世帯所得が 200～349 万円の層では、理想学歴に違いはない。④ここで注目されるのは、両親学歴が子どもの理想学歴に与える直接効果である。というのは、もし両親学歴が高いと世帯所得が高く、それが高い成績に結びついている（図IV-4-1 のパス a→パス b）だけであれば、両親学歴の直接効果（パス e）は世帯所得に完全に吸収（変換）されて有意でなくなるはずだからである。⑤しかし現実にはそれが有意なまま影響を保っているということは、世帯所得が高くてもそれだけが理想学歴を高めるのではなく、世帯所得とは独立に両親学歴が理想学歴に影響していることになる。

では、他の変数をすべて統制しても、なぜ両親学歴の効果が依然として残るのであろうか。また、そもそも両親学歴とは実態として何を表しているのだろうか。世帯所得は資産を加味していないとはいえ、現在の家庭の状況のある程度は反映（規定）しているであろう。他方で、両親が最後の学校を出てからすでに 20 年前後の時間が経過している。そうした親の学歴が子どもの理想学歴に関連するというのも、考えてみれば不思議ではある。

この疑問を解く手がかりは、「両親の期待学歴」にある（荒牧 2011）。一般に両親学歴は、家庭の文化的な雰囲気や教育への関心を表すといわれる。学歴の高い親のほうが、高い学歴を得ることを子どもに期待し、有言か無言かを問わず子どもの学歴アスピレーションを鼓舞しやすいだろう⁸。

そこで表IV-4-1 のモデル 1 にさらに両親の期待学歴を追加してみた（図IV-4-5 参照）⁹。もし

たときの効果とは異なる。さらに独立変数が増えるとその解釈が難しくなることが多いので、ここでは最小限の独立変数を投入した。またオッズ比は、1 より離れるほど、その独立変数（カテゴリー）の影響が大きいことを示す。

⁸ もちろん学歴が低い親が自らの経験から、子どもにだけは高い学歴を得てほしいと願うこともありうるが、全体としてみれば学歴の高い親が高い期待学歴を持つことのほうが多いと考えられる。

⁹ 保護者票の問 9 で、回答した親の期待学歴を、問 48 でその配偶者（離死別者を含む）の期待学歴を尋ねているので、それらを組み合わせて両親の期待学歴とし、無回答を含めて 5 つに分類した。ただし配偶者の期待学歴は配偶者自身が答えたのではなく、回答者の推測によるものである点に留意する必要がある。また①両親の期待学歴と②子どもの理想学歴の連関は強く、ここで想定している①→②の因果関係のほかに、②→①という逆方向（たとえば子どもが大学に行きたがるので、親もそれを期待する）の因果も考えられる。しかしモデル 2 ではそれを考慮していないので、より洗練された分析が今後の課題となる。

両親学歴の正体が両親の期待学歴であれば、両親学歴の直接効果（パス e）は両親の期待学歴に吸収されて有意でなくなるはずである。結果は表IV-4-1のモデル2に示した通り、⑥両親の期待学歴が子どもの理想学歴（パス f）に影響するだけではなく、⑦両親学歴も、子どもが大学を志望するかどうか依然として有意な直接効果を保っていた¹⁰。つまり子どもが大学に行くことを親が期待するだけではなく、両親のいずれかまたは双方が大卒であること自体に、子どもが大学を希望するなんらかの効果があるということである。ただし⑧世帯所得の直接効果（パス d）はほとんど有意でなくなった。言い換えれば、世帯所得が高い親は学歴期待も高いので、世帯所得が直接的ではなく、両親の期待学歴を経由して間接的に理想学歴に影響していると考えられる。

4. 理想学歴の平等とは

少々わかりにくいのが、両親学歴が子どもの理想学歴にあたえる直接効果に着目したのには訳がある。その意味を理解するために、迂遠かもしれないが、そもそもどのような状態がより平等なのかを考えてみたい。すべての子どもが大学進学を希望する社会が、より平等な社会であろうか。そう考えることもできるが、子どもひとりひとりの希望や適性を考慮すれば、大学など行きたくないという子どもがいてもおかしくない。したがって、一般には、子どもの育った家庭と理想学歴が関連しない状態が、より平等だといってよいだろう。本データに即していえば、世帯所得や両親学歴に関わらず（つまりどの所得階層であっても、また両親学歴が何であっても）、大学進学を希望する子どもの比率が、全体の比率と一致している場合である。実際には、先に見たとおり、それとは程遠い状態にある。

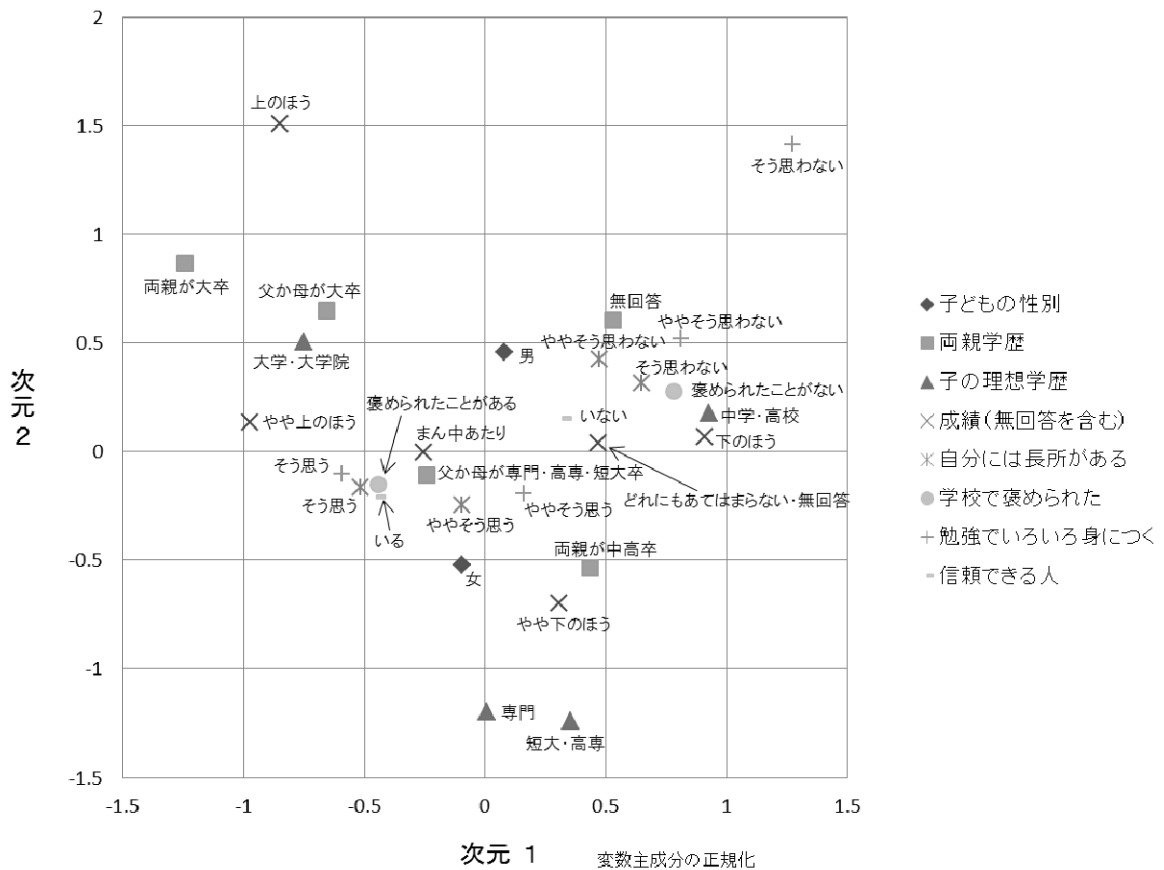
ではどうすればよいのだろうか。このとき注目すべきなのが世帯所得と両親学歴の違いである。両者はいずれも家庭環境を表しているものの、社会政策上の扱いは大きく異なる。なぜなら世帯所得のうち教育にかける資金が不足する家族には、租税や給付など国家の所得再配分政策によって補うことがいちおう可能である。しかし両親の学歴を国家が統制したり、子どもへの教育期待に介入することは不可能であるし、近代社会の理念に照らして望ましくもない。

その意味で、子どもの理想学歴に対して両親学歴の直接効果が残っていないのであれば、両親学歴は世帯所得などに変換されるので、所得を補助することで、ある程度は理想学歴、ひいては子どもの実際の学歴が平等化する可能性がある。そうした補助はもちろん必要であろうし、貧困世帯が増加している今日、施策としての重要性は高まっているといえるだろう。しかし、両親学歴の直接効果が残っている以上、残念ながら、それだけでは理想学歴は平準化しないことも同時に予想される。ここに高等教育を受ける（あるいは受けようとする）機会の平等を実現することの難しさの一端が垣間見える。

5. 結びに代えて

これまで論じてきたことを一言でいえば、子どもの理想学歴には、家庭環境が少なからず影

¹⁰ ただし表には示していないものの、両親学歴と成績の交互作用をモデル2に投入すると、両親学歴の一部のカテゴリーは有意でなくなる。このように交互作用やあらたに別の独立変数を投入すれば、両親学歴の直接効果が消失することは当然ありうる。したがって、あくまでもモデル2に関する限り両親学歴の直接効果が残ることを主張しているだけである。



図IV-4-6 理想学歴をはじめとする8変数間の関連図

注. 相対的貧困層、または相対的貧困でない世帯所得 200～349 万円の家庭（383 世帯）に限定し、多重対応分析の結果を示した。固有値は次元 1 が 2.218、次元 2 が 1.555。

響しているということである。具体的には、両親のいずれかまたは双方が大卒で、世帯所得が多い家庭の子どものほうが、大学進学を希望しやすい。もちろん、これはあくまでも理想の学歴であって、そうなる保証はない。またどのような学歴を志望しようと、個人の自由ではないかという意見もあるだろう。けれどもこれまでの研究から、理想学歴は実際の学歴と、そして学歴とその後の職業や所得は、関連していることが明らかになっている。つまり好むと好まざるとにかかわらず、今日の日本は学歴社会なのである。そうである以上、子どもの理想学歴が家庭環境に左右されるといった現象は、機会の平等という視点に立てば、望ましいことではあるまい。

しかし、かならずしも悲観的になる必要はないように思われる。その理由はふたつある。ひとつは表IV-4-1 モデル 2 の分析枠組みで説明できるのは、子どもの理想学歴の違いの半分程度である。こうしたモデルとしては高いとはいえ、残り半分は、図IV-4-5 に組み込まれていない未知の要因（それは図中の「誤差」で表現されている）による。これは以上の分析が不完全なことを白状するようなものであるが、それが偽らざる現実である。もうひとつは、以上の連関はある程度は確率的に生じたものであり、決定論的に受け取る必要はないからである。たとえ相対的貧困層の家庭で育っても、大学を志望することはもちろんできるし、これまでも実際

に進学している。

そこで最後に、大学進学に際してもっとも不利と思われる環境で育った者のうち、大学進学を希望しているのはどのような子どもなのかを確認しておこう。図IV-4-6は、相対的貧困層、または相対的貧困でないものの世帯所得が200～349万円の家庭で育った子どもを対象を絞って、自分に長所があると感じているか（子ども票問30B）、親以外に信頼できる重要な他者がいるか（問31の1）、勉強の意義を見出しているか（問17C）、学校で褒められた経験があるか（問33の5）と、子どもの性別、成績、両親学歴、そして理想学歴の相互の関連を、多重対応分析によって図示したものである。原則として、図中で近くに描かれた属性は関連が強いことを示す。たとえば図の中央よりやや左側で、「父か母が大卒」「理想学歴が大学・大学院」「成績がやや上のほう」が近くに位置しているので、父か母が大卒で、成績がやや上のほうの子どもは大学進学を希望することが多いといえる。

ただしこうした傾向は全員を対象としたこれまでの分析から明らかである。そこで親以外の重要な他者の存在に着目すると、そうした人が「いる」または「いない」と、「理想学歴が大学・大学院」とは図IV-4-6のうえでいずれもほぼ等距離にあるので、そうした他者の存在の有無は理想学歴とあまり関係ないことが分かる。他方で、勉強の意義を認める（「そう思う」）は、認めない（「そう思わない」「ややそう思わない」）にくらべて「理想学歴が大学・大学院」との距離が相対的に近いので、認めている子どものほうが、どちらかといえば大学を志望することが示されている。同様に学校で褒められた経験が「ある」者のほうが「ない」者より、また自分に長所があると感じている者のほうが、大学を志望しやすい。もちろん現実には複雑なので、この結果だけから結論を導き出すのは慎まなくてはならない。

しかも、こうした結果は容易に予想され、なかば当然ではある。けれども示唆することが全くないわけではないだろう。そう考えたとき問題となるのは、自己肯定感や勉強の意義をどこで育むかである。それを家庭だけに求めたのでは、問題は振り出しに戻ってしまう。他方で学校は、親の所得や教育への関心といった家庭にある格差を、是正するどころかむしろ拡大する装置に過ぎないといった見方もある。たしかに今日の学校は多くの課題を抱えている。しかし家庭に代わって、その制約をどの子どもからも公平に取り払うことができるのは、いまのところ学校教育しか見あたらない。学校教員への過度な負担が生じないように留意しなければいけないとはいえ、特に初期の義務教育のなかで、学ぶことの意義をどの子どもに対しても醸成していくのが正攻法であろう。親を選ぶことやかえることはできないが、学校での実践を、より平等な社会への一歩にすることは可能だと考えたい。

文献

荒牧草平, 2011, 「教育達成過程における階層差の生成—「社会化効果」と「直接効果」に着目して—」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会 1 格差と多様性』, 東京大学出版会, 253-266 頁

片瀬一男, 2005, 『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容』, 東北大学出版会

吉川徹, 2009, 『学歴分断社会』(ちくま新書), 筑摩書房